

る事実からも肯定し得ると思う。

(国立療養所松丘保養園)

47 『紅夷外科宗伝』図版成立へのスク  
ルテタス(Sculetus)の外科書 *Arma-  
mentarium chirurgicum* の影響

蒲原 宏

長崎大学図書館医学部分館蔵の『紅夷外科宗伝』(宝永三年一七〇六)は、来日した蘭医 Willem Hoffman から一六四九年刊 schipper 版のバレ外科全集 *De chirurgie ende opera van alle de werken van Mr. Ambroisius Paré* を譲られた榎林鎮山が、それを原典として編訳し、中国の『外科正宗』にならひ成稿したとされていた。極似した著作として、西玄哲の『金瘡跌撲療治之書』享保二〇年一七三五(京大蔵)、『和蘭外科宗伝』正徳四年一七一四(国会図書館蔵)、『南蛮外科手術図巻』寛政二年一七九〇(神戸市立南蛮美術館蔵)、『紅夷外科宗伝』年代不詳・旧嵐山家本(香雨書屋蔵)、『金瘡跌撲療治之図』年代不詳(伊良子光孝氏

蔵)、『金創秘授外科訓蒙図彙』明和六年一七六九刊が知られている。

これらの挿図をパレ外科全集(フランス語版、オランダ語版、英語版)によって比較してみると、パレ外科全集から引用された図の他に、全く該当しない外科器具図、治療図が多くある。この事実は、関場不二彦、岩熊哲、酒井シヅ、大村敏郎氏及び演者も指摘していたが、確実な医史学的立証が行われず、推定にとどまっていた。「紅夷外科宗伝の成立に関する研究」を行うにあたり、前記各書の挿図「金瘡跌撲療治図」九二図についての原典追求を行った。パレ外科全集から引用されたと証明できるのは九二図のうち三三三図(三五・九%)である。それ以外の五九図について入手し得る限りの十六・十七・十八世紀出版の西洋外科書の挿図と比較検討を行った。

その結果、五九図中三七図(六一・七%)即ち全九二図では四〇・二%がドイツのUlmの外科医 Joannes Scultetus, Johann Schultes (一五九五—一六四五)の著書『外科の兵器庫 *Armamentarium chirurgicum*』に由来することが証明できた。しかし、この引用は一六五六年 Haag 刊のラテン

語、一六五七年 Amsterdam 刊のオランダ語版 *Magazyn of te wapenhuyjs* 及び同年 Dordrecht 刊の同書がある。一六七一年 Amsterdam 刊オランダ語増補版 *Het wapenhuyjs der chirurgie* (Joann Bapt. van Lantzwerde 増補) 或 *Het nieuwe wapenhuyjs der chirurgie* (増補版)の何れから引用されたと推定される。増補版からの引用図が七図(七・六%)あるので、Scultetus の外科書からの引用は計四四図(四七・八%)となる。

二つの増補版の何れかからの引用の可能性が高い。パレ外科全集からの引用率三三三図(三五・九%)を上回っている。しかし全てが Scultetus 外科書のオリジナルではなく、古いギリシャ、ローマ時代の伝統を引く治療法の挿図化もあり、Guido Guidi (Vidus Vidius) の *Chirurgia, e Graeco in Latinum conuerse* 一五四からも影響、引用されている。しかし、Sculetus の外科書が我が国に輸入された記録は、パレ外科全集のように明確ではない。現在までの調査では、一六七一年 Amsterdam 刊のオランダ語版 Scultetus の外科書の内容は確認することができなかった。檜林鎮山らが Scultetus の原書から図版を転写したこ

とは確かであるが、その経緯は明らかでない。『紅夷外科宗伝』等の金瘡跌撲療治図九二図のうち、パレ外科全集、スクルテタス外科書に由来する計七七図(八三・七%)については明らかにしたが、残る一五図(一六・三%)はその引用原典が依然不明である。このうち、頭部開皮図は Ivlili Caserri (Guilo Caserri) の *Tabula anatomicae* 一六二七年刊所載の図によく似てはいるが確実な証拠ではない。

*Scultetus* の外科書 *Armentarium chirurgicum* はパレ外科全集以上に図解を主とした外科書であり、図版によって理解し易い形で取り入れられ、『紅夷外科宗伝』の成立に寄与したのである。

疑問は持たれながらも『紅夷外科宗伝』等の挿図の由来は、パレ外科全集からの引用のみが強調されてきたが、もう一つの大きなルーツがドイツの外科医スクルテタス (*Scultetus*) の『外科の兵器庫 *Armentarium chirurgicum*』にあったことを立証した。引用原典不明の残り一五図については今後も追求の必要がある。

『紅夷外科宗伝』等の編訳構成にあたっては、オランダ

との通商交流を通じ、オランダ語版のフランス、ドイツ系外科を代表する外科書が参考にされ、その図版が豊富に引用されたのである。それにより、ギリシャ、ローマの伝統を引くルネッサンス以後の新しいヨーロッパの外科治療法が図解の形で混然とではあるが受容されたのである。

(新潟大学)